特別寄稿

# 『空知産炭地域再生への手かがり「炭鉱の記憶」の価値』

NPO法人炭鉱の記憶推進事業団　理事長　吉岡　宏高（よしおか・ひろたか）

略歴：1963年生まれ、三笠市幌内出身。福島大学経済学部卒、札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科修了。（株）たくぎん総合研究所主任研究員などを経て、1997年にまちづくりコーディネーターとして独立。2004年から札幌国際大学観光学部に勤務（現在は准教授）するかたわら、地域資源を活用した地域づくり活動を自ら展開している。

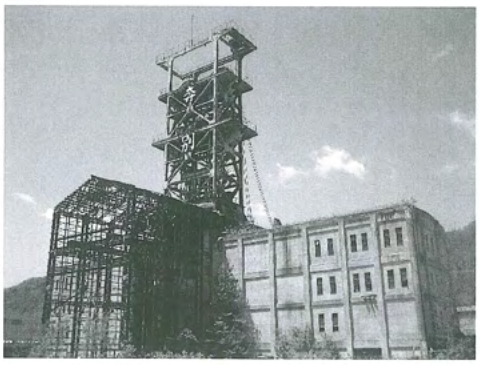
大変な時代になったものだ。ともかく今日の飯を稼ぐのに精一杯で、明日のことなど考えている余裕などない。本来、儲からないが社会にとって必要なことをすべき行政でさえ、すぐに現れる成果を求められている。自分で考えることができない、つま先しか見ていない人々が、すでに効力を失している過去の成功パターンに沿って、ただただ走り回っている。ともかく何かやっていないと、自分の存在意義や地位を失うのだから大変なのだ。

そんなドタバタを20年重ねた結果、新たな価値の創出は止まり（GDP：500兆円台で停滞）、借金だけが増えた（国・地方債合計：200兆円→900兆円）。「でるきこと」をいくら積み重ねても、「やるべきこと」が達成されるとは限らない。貴重な時間をロスしている間に、人口増加でもたらされた成長ボーナスを使い切り、急激な人口減少・高齢化という凝縮社会に突入しようとしている。こんな状態を見て育った今の大学生たちが、「何をやっても仕方がないのだ…」と諦めムードになってしまうのも、無理からぬことである。

このような日本の様を、実は40年前から先駆的に実践してきた地域がある。それは、空知産炭地域だ。1960年代を境に、石炭から石油へと外的環境が激変したにもかかわらず、誰も変わりたくなかったし、変わろうともしなかった。三笠市の北炭幌内炭鉱で育った私は、自分が生まれた1963年をピークに、坂道を転げ落ちるように会社が傾き、まちが壊れて行くのを目の当たりにしてきた。さらにあろうことか、そもそも炭鉱によってまちができたのに、「炭鉱は暗い」の一言で、過去を消し去ろうとする履歴詐称までやってのけたのだ。国から得た多量のカンフルを、自ら考えることなくカナダやチロルやロボットといったものに使い果たしてしまった結果が、地域破綻となって現れている。

空知産炭地域の過去が、日本の行く末を暗示している気がしてならない。それは、崩れゆく過程を経験した私だけに見える、デジャヴ（既視感）なのだろうか。空知産炭地域の今日の姿から過去のプロセスを辿ることによって、これから日本が進もうとする、誰も経験したことがない凝縮社会への教訓を得ることができるだろう。その手かがりとなるのが、地域に残された「炭鉱の記憶」である。歴史から学ばない者は、同じ失敗を再び繰り返す。

「炭鉱の記憶」の有効性は、過去からのメッセージにとどまらない。先が見えない、逼塞した時代だからこそ、ひたむきに前へ向かって進む気力が不可欠である。この力強さこそ、過酷な坑内労働や独特の密集居住のコミュニティから生み出されてきた「炭鉱の記憶」の最たるものであろう。表面的な成長を追ってきた中で見向きもされなかった見えざる資産は、未だ産炭地域に埋蔵されており、立坑やズリ山や炭住という物的な炭鉱遺産から芋づる式に手繰ることができる。時代の変化は、産炭地域の思いを受け止め共感してくれる人たちの姿を、次第に顕在化させてきた。地元の人たちが「ゴミだ、廃墟だ」と言っているものを、地域外の人たちは「美しい、力強い」と言い、特に若い人は炭鉱で生きた人の話しに謙虚に耳を傾ける。



閉山後約40年を経た今も残る住友奔別立坑（三笠市）

地域固有の「炭鉱の記憶」をもとに、地域再生に取り組んでから10年余が経過した。昨年8月には、当NPOの念願であったビジターセンターをJR岩見沢駅前に開設することができた。地域内と地域外、過去と未来を緊密に結ぶ焦点が絞られたことで、新たな展開に向けた手応えを一段と感じている。